
Mermaid princess ~ 初恋の相手 ~

三月 亜莉棲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mermaid princess 〈初恋の相手〉

【Nコード】

N4560Z

【作者名】

三月 亜莉棲

【あらすじ】

『またあえたら、唯ちゃんにちかうよ！ぼくが唯ちゃんをおよめさんにもらう！』

懐かしい声。それは初恋の声。
アナタはいまどこにいるの？

会いたい。昔の約束を果たして欲しい。

アタシはいつまでも待ち続けたい。
でも、それも難しいかもしれない。

会いに来てよ。

そうしてくれないと、アタシ『さびしい』から――。

15年のときを越えて。

甘酸っぱい恋がいま、動き出す――。

M e r m a i d 1 思い出の男の子（前書き）

またまたオリジナルです！

読んでくれるとうれしいなあ

M e r m a i d 1 思ひ出の男の子

『またあえたら、唯ちゃんにちかうよ！ぼくが唯ちゃんをおよめさんにもらう！』

「唯架あゝ？」
「なんや？朱湊。」

ウチは18歳。名前は千秋 唯架。
将来、小説家が歌手になりたい高校2年生。

「明日さあ、合コンいかへん？」

この子は、宮田 朱湊。
生まれたときから一緒に幼馴染でウチと一緒に歌手になるうちゅう

のが夢らしいわ。

ウチは大阪生まれの大阪育ち。もちろん朱湊もや。
やからずっと関西弁。簡単に言えば大阪弁やな。

これから、ウチはなにが起こるかこん時はなんも知らへん。

ウチは精々、皆さんがこの物語を読んでくれるのを願うばかりやな。

M e r m a i d 1 思い出の男の子（後書き）

感想等お待ちしております。

あと、短編集のリクエストもお待ちしております

M e r m a i d 2

「宮田朱湊です」

趣味は料理で将来は唯架と歌手になりたい高2です」

「千秋唯架です」

趣味は読書とピアノで将来は歌手か小説家になりたい高2です

」

自己紹介が終りとうとう自由時間になったんやけど・・・

「ねえねえ唯架ちゃんって好きな人おらんのお？」

「い、いませんよぉ。」

「じゃあさ僕と付き合わへん？」

「ええ、そんないきなり・・・」

「いいなあ俺も付き合いたいわ！」

なぜか、ウチがつかまってもうて・・・

「大丈夫やった？えっと・・・唯架ちゃん、だっけ？」

「あ、ありがとう。えっと・・・」

「早乙女一樹さおとめ かずきっていうんだ。」

「へえ、早乙女君ありがとう。」

「ねえ、もしかして附属高校？」

「うん、街宮大附属高校だよ？」

「じゃあ同じ学校やないか！」

「じゃあ。また会う？」

「うん。俺、2・D。」

「うち、2・C。なんや近かったんやな。」

「じゃあ会えはまたね。」

「うん！」

「こんとき、ウチはなんだか懐かしいような気がした。」

Mermaid3

「ふふうん 結局唯架はつくれんかったんかあ か・れ・し・」

「んもう！やめてーな。恥ずかしいやないの！」

そんとき、

「千秋いゝ。お客さんやでー！イ・ケ・メ・ン・の！」

「ちよつといい加減にしてくれへーん！？
んもう。」

そこにいたんは、

「よつ 早速きたったで（笑）」

「さ、早乙女君？」

そ、早乙女一樹君やった。

「なんやあゝ？彼氏か！？」

「ちよつ峰！彼氏やないし、てかふざけんのもいい加減にせんと・
」

峰、後ずさり・・・。

「わっわるかったて。もういいません。」

「よろしい。」

屋上。

なんとか逃げてきました（汗）

「なあ。なんで峰。後ずさりなんか・・・。」

「あああれ、アレはウチが弓道道場の主の娘やからよ。」

「弓道？唯架ちゃん。弓道やってんの？」

「んまーね。部活も弓道部だよ？」

「ほお、俺、剣道やってんねん。」

おりよりよっ

予想外やったわ。でも。かつこいい。

「つてことは朱湊知つとるんやない？お兄さん、剣道やってはるから……」

「苗字なんなん？」

「宮田やけど。」

「ああ！知つとる！強いんだよなあ。憧れるわ。」

「そうそう、あつよかったらウチ来て見る？ウチ、弓道、剣道の道場やから。」

朱湊のお兄さんの橙哉^{じゆう}さんもそこやし。今日来るよ？」

「行く行く！絶対行く！」

「うふふッじゃあ放課後。部活終わったらメール頂戴？メアド教えとくから。」

「おう！」

ウチらはとりあえずメアド交換して、教室に戻ったんや。

M e r m a i d 4

パシyunッ トスツトスツ

ここは、とっても、綺麗なウチの道場。
いまは稽古中で人がぎょうさんおるんや。

「ただいま、みなさん。」

「「「お帰りなさい！唯架嬢！」」」

ダダダダッ

「ただいま、みくに 美国、じん 陣、ひむろ 氷室。」

この三人はウチの付き人。
というか、身の回りのお世話はこの三人がするんや。

「お嬢。その男誰なんですか？」

「ああ、D組の早乙女一樹君。朱湮のお兄さんに会いにきたのよ。」

「よろしゅうお願いします。」

「ということとは剣道やつとるんか？」

「まあ一樣。」

そんなとき、

「こんにちはー！」

噂をすれば・・・

宮田橙哉が表門から入ってきた。

「あつ橙哉先輩！」

「おおこんにちは、唯架。どーしたんや？」

「D組の早乙女君が橙哉先輩に会いたいそうで・・・つれてきちゃいました（笑）」

「ほお、おつ早乙女つて早乙女一樹のことか、久し振りやな。大会以来やな。」

「そーっすね、久し振ります。」

「そうやつ！丁度いい。お手合わせ頼みましょか？」

「いいですよ。持ってきてますから。」

こんなかんじで（ウチはぜんぜんついてないけどな・・・）
早乙女君と

橙哉先輩の手合わせが行われた。

バンッバシンッ バンバンッ

「メーーン！！」

「ドウッ！」

2対2のいい勝負。

次、どちらかが打てば勝者が決まる。

でも、このとき唯架は二人がどうしてこんなに必死に戦っているのか
まったく知らなかった。

M e r m a i d 4 (後書き)

次回、二人の必死な勝負の理由がわかります

次回をお楽しみに！

M e r m a i d 5

「……メーーーーーン!!!!!!!!!!」

勝負は付いた。

早乙女君が勝った。

「ありがとうございます!」

二人ともいい勝負だった。

どっちとも強かった。

「ただいま、いま手合わせしたんは誰かしら?」

こんとき、部屋の向こうのほうから3人が駆けつけた。

「お帰りなさいませ! 梓お嬢!」

「ただいま、凜、嵐、透。」

いまの梓お嬢っていうのがウチのお姉ちゃんの千秋梓。

ウチの道場の3代目当主。あ、1代目はおばあちゃんで2代目がお父さんな。

「梓姉ちゃん、おかえり。」

「ただいま、唯架。」

んで、この『凜、嵐、透』が梓姉ちゃんの付き人。

んまあ、ウチのお付と姉ちゃんのお付のうち、凜と氷室が大学生まあ成人。

あとの嵐、透、美国、陣の4人は私と同じ高校の生徒。まあ学年がそれぞれだけど。

「じゃあ、そろそろ俺帰るわ。」

早乙女君は荷物をまとめた。

「そっか。じゃあまた明日学校であつたらね。」

「ああ。じゃーな。」

早乙女君はいつてしまった。

「じゃあ私は温泉おふろにいつてくるから。あとはよろしくね、氷室、凜。」

「はい！お嬢。」

Mermaid 6 氷室と凜のわからないことご説明コーナー

はいっ

ここでおまけのわからないことご説明コーナー!!

私、氷室と・凜がご紹介しまーす! あ、ちなみに凜は男だぜ!

ではでは早速・・・

(図鑑係式ですのでこれからはよろしく願います! 上の

『氷室と凜のわからないことご説明コーナー』というのがで
ていたら

おまけか図鑑形式です)

!! Q

!! A

梓の言っていた温泉とは!?

千秋家の横には温泉旅館『千秋』があります。

千秋家は先祖代々この温泉の女将などをしてきました。
いまの女将は梓お嬢と唯架お嬢のお母さん。

若女将は唯架お嬢です。

上の旅館の付き人6人の担当係は！？

凜Ⅱ接客《老女担当》 氷室Ⅱ接客《全般的。予約の受付》
透Ⅱ接客《笑顔で和ませる担当、男女問わず》
陣Ⅱマッサージ《お客のリラックスコース》
美国Ⅱ芸事《コース、または宴会の場》
嵐Ⅱ食事《お客様へのコース料理が得意》

です。

千秋家の家系図って！？

千秋 沙織さおり 母
千秋 草庵そうあん 父
千秋 木暮こくれ 長男
千秋 梓あずさ 長女
千秋 唯架ゆいか 次女
千秋 唯架きよか 次女
千秋 京華 末女

母方の家族

蘭田 日和ひより 祖母
蘭田 浩太郎こうたろう 祖父

父方の家族
千秋 仙蔵せんぞう 祖父
千秋 柚子ゆずこ 祖母

です。

こんな感じです

わからなければ、このお話の作者『三月 亜莉棲』にメッセージ、
または感想で
お伝えください

氷室&凜

Mermaid 7

「お、おはよう・・・。」

「おうつ！おはよう唯架ちゃん」

なんでウチがこんなに同様してるかって？

そりゃあ、家の前にリムジンで現れたんやから同様せん理由^{わけ}ないやろ！！

しかも、早乙女くんスーツやし・・・

「あの・・・なんで？」

「唯架ちゃんのお母さんに用があるんだ。いまいいかな？」

「ちょ、ちよつとまってて。」

タタタタタッ

バンッ

「オカン！お客さんがリムジンで・・・。」

「へっ？ど、どういこと？」

「やから、オカンに話あるからいまええかって！ウチの友達^{ともだち}の早乙

女君って子なんやけど・・・」

「さ・・・早乙女えええええつ!!」

「ど、どないしたん？」

「はよう中にお連れして!はよう!」

「は、はい。」

というわけで、早乙女君を招き入れたのですが・・・
いったいどないしたんやろか？

M e r m a i d 7 (後書き)

次であっ詳しくわかると思います・・・

次回もお楽しみに!!

M e r m a i d 8

「失礼します。」

「ど、どうぞ。」

ガラッ

「お、おかけになって。」

「あの、今日は何の御用で来たのかしら？」

早乙女くんは顔色ひとつ変えず言い放った。

「じつは、父から頼まりました。」

父はここを買収したいそうです。」

「「ば、買収っっ!!」」

ドサッ

「ゆ、唯架!?! いける? 大丈夫?」

「こ、腰ぬけてもうた・・・。」

「とりあえず座り。で、なぜサオトメホテルが旅館^{ウチ}なんかを買収に
?」

このとき、

ウチはあれっ?と思ったんや。

やって、早乙女くんの家のことサオトメホテルで・・・

買収?どゆことや?

「ちょ、ちょっとまって！早乙女くん、まさかホテルの御曹司やないよね！？」

「ううん。唯架ちゃんの言うとおりや。」

早乙女くんの言い方はあまりにもさっぱりしていた。

そして、こんなときからウチは早乙女くんの本心がわからなくなり、そして商売敵になり、信じる事が出来なくなってしまった。

Mermaid

「そう、そうやったんや！」

「ゆ、唯架？」

オカンは同様してる。

「早乙女君は旅館^{ユウ}の買収のためにウチに近づいたんやろ！
橙哉さんに会いたいとか言ってウチの道場に来たり！なんで人を
裏切るようなこと・・・う・・・っ・・・ふえ・・・！」

パシンッ

唯架の手は一樹の頬を叩いた。

そして、唯架は頬に光る涙を流しながら部屋を後にした。

でも、唯架にはわかったことがあった。

それは

『自分は早乙女一樹が好きだったという』

悲しくももう、信じることの出来ない出会いを思っしかなかった。

「ねえ唯架、もういいでしょう？そろそろ学校行きましょう？」

「やだ。」

母はあきれ気味だ。

あんなことがあってからもう4日間、学校にも行かず、ご飯を食べ
て温泉に

入ったら部屋にこもり、その繰り返し。

お付きもみんな心配で疲れ気味。

梓のお付きは唯架のお付きがいつ倒れてしまうかと心配だったほどだ。

「大丈夫かしら・・・唯架。」

「お嬢、話してみますか？唯架お嬢と。」

「ううん、そっとしておいたほうがいいと思うもの。
行きましょう。昂すはるがまつてるし・・・」

「そうですか。いつてらっしゃいませ、お嬢。」

「いってきます。」

梓は家を出た。

昂すはるとは京椿 昂すはるという

京椿温泉旅館＆ホテルの御曹司。

そして、梓の幼馴染であり彼氏。

唯架とも昔からの付き合いで仲がいいし

梓はいつも唯架が落ち込むと相談している相手。

今日も梓は昂に頼ることになってしまいそうだ。

M e r m a i d 1 0

「唯架ちゃんが？」

「そうなの。」

ここはとあるカフェ。

梓と昴の行き着けの店である。

「でも、なんか俺たちと似てるな。」

「えっ？あ、でも確かに・・・」

梓と昴の両親はある事がきっかけでお互いを嫌っていた。

梓は母に言われ昴にすべてで勝るよう、教育を受けたがすべて失敗が続いていた。

でも、あることが理由で昴が梓にアプローチ。

梓も昴が好きだというキモチに気づき、二人はこっそり付き合う。

そんななか、たくさんの困難を切り抜け、二人は来月結婚予定だ。

20歳という若さで結婚。

大学側も驚いたが了承してくれた。

そんなこんなで二人はラブラブなのである。

唯架と一樹も同じようなことだ。

梓は一樹が唯架がすきで旅館を買収しようとしているとわかっていた。

そして、同じことをした自分の彼、昴も同じように思ったのだろう。

「どうすればいいと思う？ 静かに見守るのがいいのかしら。」

「そうだね、そのほうがいいよ。あとは唯架ちゃんが一樹君へのキモチに気づいているかなだね。」

「多分、気づいていると思うわ。」

「じゃあ、大丈夫だよ。俺たちみたいに仲は戻るさ。」

「だといいわね。」

梓と昴の思いは唯架のココロにとどくのだろうか。

いまはそれを、静かに待つのみだ。

M e r m a i d 1 1

ここは京椿ホテルの温水プール。

そこで泳いでいるのは人魚。否、唯架である。

休みで一日中暇な唯架。友里恵も篤朗とのデートだということ
で遊べなかった。おかげで今日は一日中一人だ。

スイーッ
ー

唯架の泳ぐさまは人魚のようだ。

そこへ、ある人物が入ってきた。

『そうですけど・・・でも』

『弱虫だな。がんばってアタックしろよ！好きなんだろう？
・・・』 が・

唯架は男性二人が入ってきたのはわかったが泳いでいたため誰かは
わからなかった。

梓はちょうど飲み物を取りにプールにある付属のバーに行っていた。

唯架は男性が恋バナをしているのに気づき誰か確かめようと
隠れて聞いていた。

『お前、それでも男かあ。ってかお前の父さんすげーな。
大女将が好きで買収なんて・・・で、お前が行ったのは
のた

めだろ？』

毎回、名前を出そうとすると見つきりそうになり温水の中に入って名前が聞き取れない。

困っていた。

そして、その名前をとつと聞き取ることができた。

『で、これからどうするんだ。』

『彼女が気づくようにがんばります。』

『唯架ちゃん、気づくといいな』

そう、自分だった。

M e r m a i d 1 2

次の日ウチは早乙女君にあった。

彼がいつもいた、海辺のカフェのラウンジ。

こちら辺は海が近いからそういうカフェが多いんやけどいつも、彼はその決まった席に座っていた。

「早乙女君。」

「ゆ、唯架ちゃん」

早乙女君は驚いたようだった。

ウチは率直に話し始めた。

「ねえ、ウチラ昔なんかあったん？」

彼は答えない。

「聞いとる？むか「わかんねーのかよ！」

あたりには誰もいなかった。

誰もいないせいか、早乙女君の声がよく響いた。

「俺はずっとまってるのに・・・それでも・・・」

ダッ

「さ、早乙女君!」

早乙女君はどこかにいってしまった。

でも、ウチは早乙女君が何を言っているのかぜんぜんわからなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4560z/>

Mermaid princess ~ 初恋の相手 ~

2012年1月1日21時47分発行